
魔法使いの嫁

ふとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの嫁

【Nコード】

N8280K

【作者名】

ふとん

【あらすじ】

あるところに国中から恐れられている魔法使いがおりました。彼の住んでいる家には誰も近づきません。

しかし、ある日、お城からとんでもない御触れが出されたのです。

魔法使い

むかしむかし。

あるところに国じゅうからきらわれている一人の男がいました。

町外れにある男の家には猫一匹よりつきません。

というのも、男が恐ろしい魔法使いだったからです。

棚には墓から掘り出した骸骨が並べてあるとか、得体の知れない薬を作っているとか、果ては娘の生き血を吸うとか、色々な噂がありました。ただ、目の当たりにした人がいないので、嘘か本当かはわかりませんが。

ですが、時々、町に姿を見せる男の風体といたら、不気味そのものでした。

白く長い髪と髭に顔は覆われて、黒いローブを頭から被っているのです。気味悪く思わない人はいませんでした。

町から追い出してしまうおうという声もありましたが、男は何と王様のお気に入り魔法使いだったのです。

どこの国の王様もおかかえ魔法使いを一人は宮廷に置いていましたから珍しいことではなかったのですが、城に住まわせず町外れに住まわせていることは珍しいことでした。それに、おかかえ魔法使いには珍しく、この嫌われ魔法使いは町の人たちにも力を貸していたのです。

大雨で防波堤が決壊した時は土の魔法で泥を固めて水を食い止めましたし、火事が起こったときは水の魔法で雨を降らせました。こまごまとしたことでは、腰痛で動けなくなっていたおばあさんの腰を直す薬を作ったり、好きな人がいる人にうまく告白ができるおまじないを教えたりしていました。

そういうこともあって、町の人たちは何かしら彼の世話になっっているため、追い出そうにも追い出せず、結局、町の外れに住まわせ

ているのです。

そんなある日のこと。

町にとんでもないお触れが出されたのです。

お城からのお触れ

『魔法使いの花嫁』

紙面にはこう書かれている。

魔法使いはこの世に幾人もいるが、この町に魔法使いは一人しか知られていない。

町中で嫌われている、というよりも恐れられている魔法使いが。

一週間ほど前に町の角に張り出されていたのを、フェネルは記憶していた。

曰く。

魔法使いの花嫁候補を探している、と。

馬鹿馬鹿しいと呆れてさっさと店仕事に戻ったフェネルは今の今まですっかり忘れていた上、詳しい内容までは覚えていない。ただ、店に帰ると従業員の大半がその話題で持ちきりだった。後はその日食べた夕飯の献立ぐらいしか思い出されない。

フェネルは上質の紙を慎重に裏返した。

裏に印刷もされていない真っさらな紙である。おまけに封筒までついていた。普通、庶民が封書を郵便に預けることは少ない。ただ手紙を書いた紙を封筒のように折って送るのだ。それも稀なことで、貴重な紙を使ってわざわざ連絡するような豪気なことは急ぎの用でもない限りほとんどない。

特典はまだある。封書には蠟が捺してあるのである。ただの蠟印ではない。

「……王家の紋章よね」

盾の両脇に二匹の鷲を従えた紋章は、リユーネリア王国のものである。

フェネルは目の前に座っている男に目を遣った。

「左様でございます。その蠟印はリユーネリア王家のものでございます」

紳士はフェネルの独り言にも律儀に応えて、フェネルが用意した安い茶をすすった。こうも上品に飲んでもらえれば、骨董市で買った安物のティーカップも本望というものだろう。

三つ揃えのフォーマルスーツを一分の隙もなく着こなす壮年の紳士である。白髪の手がけ始めた髪をきっちり撫でつけた姿は人に長年に仕えてきた者らしく緊張感を他人に与えず、それでいて人形のような正確さで身じろぎもしない。それが滑稽に見えるのは、彼の座している椅子が普段フェネルが裁縫の仕事用に使っている小さな丸椅子だからだろうか。

だが、仕方が無かったのである。

このベッドと古ぼけたソファのない椅子とテーブルと小さな棚しかない家に他の椅子などない。彼に勧めた唯一椅子の形をしているソファのない椅子は断られ、フェネルが座らされてしまったために、ベッドへ座ってもらうわけにもいかず、苦肉の策で丸椅子を取り出して勧めたのである。

その丸椅子は、フェネルでも少し屈んで座るような小さな椅子だ。長身の紳士が座ると子供用の椅子のように見えた。

「……わたくしのような者に何のご用がおりなのでしょうか」
努めて下手に聞こえるように作った声も、紳士は冷静に返した。

「そのご書状にある通りでございます」

紳士に問うことを諦めたフェネルは再び手紙に視線を落とす。

『先達て触れた魔法使い殿の花嫁候補の厳正なる審査の結果』

「見事、あなた様が魔法使い殿の花嫁に選ばれました」

まるで手紙を透視でもしていたように紳士は続きを読み上げた。

ただ、フェネルは現実主義を自負しているので紳士がこの手紙の内容を幾度も聞かされていたか、実際に彼が書かされたかしたのだろうと推測する。——それはこの際どうでも良いことなのだが。

彼女は溜息をつくが、紳士は微動だにせず静かにテーブルの上にカップを置いた。

「突然のことと驚かれていますとは存じますが、一度、魔法使い殿と

お会いになつていただけませんか」

内容はふざけているが王直々の勅令である。強制的に連行されるものとはかり思っていたが、一応、フェネルの意向は確認してくれるようだ。

フェネルの応えは決まっていた。

「お断りいたします」

誰が好き好んで、嫌われ者の魔法使いと結婚したいと思うだろうか。

まして、フェネルは魔法など信じてもない。生まれてこの方、手助けされたこともないのだ。

魔法使いの嫁ならもつと信心深い女を選んでやるべきだ。

それに、魔法使いが町外れに住み始めて既に三百年が過ぎていると聞いたことがある。

伝えられている姿は、今と同じ姿だ。馬鹿げたことに、魔法使いは一般人と違うのだろうかから齡三百歳を超えていても不思議はないのだろうかと考えられている。

噂を鵜呑みにするつもりはないが、外見から判断すれば充分高齢だと思われた。遺産狙いの結婚ならまだしも、逆に実験体にも使われてしまいそうな魔法使いの嫁になど毛頭なるつもりも起きない。「ご高名な魔法使い様にわたくしのような粗忽者では吊り合いが取れませんわ」

体の良い断り文句を並べて、フェネルが今度はどうやってこの紳士にお帰りいただくか考え始めると、紳士は殊更、納得したように頷いた。

「承知いたしました」

この際、自分が貶められる名誉よりもこの先の実を取る。それがフェネルのモットーだった。

「仕方がございません」

紳士は何時の間にか取り出した杖でトンと床につく。

その音が反響し、膨張したかと思うと、ついには部屋中を包み込

んだ。

「な、何をするんですか！」

甲高い鳴動を遮るために耳を押さえたフェネルは大声で叫ぶ。だが、紳士は一向に表情を変えず涼しい声で返した。

「このまま私と共にきていただきます」

「どこへ！」

憶測は最悪の結果を予想したが、フェネルはなるべく考えないよう問い返す。

紳士はフェネルを一瞥した後、杖をもう一度ついた。

「魔法使い殿のご自宅へ、でございます」

フェネルは出せうる限りの声で叫んだ。

魔法使いの家

十歳で両親が死んだ。

それは珍しくもないことだ。長年の苦労は彼らに途方も無い辛苦を舐めさせたし、娘の目から見ても両親はあまりに優しく、あまりに世間知らずだった。

そんな両親からは溺愛されていたが、容姿は親戚中から嫌煙されていた。

老婆のような白銀の髪、そして水銀のような瞳。

髪の色は父から、瞳の色は母から、とそれぞれ忘れ形見のように授かったのだが、それが重なりと不気味な印象を作り出した。銀髪の女は珍しいのである。高齢でもない限り、こんな色になることはない。瞳も光の加減では光沢のある銀に見える。

幸い、魔法を使うような娘ではなかったため、町で面倒を見てもらえることとなり、今まで暮らせていたのだ。

それが、どうしてこんな結果を招いてしまったのか。

運命などという掴み所のないものに自分の未来を託したことの無い。だが、今度という今度は幸運とかそういうものに見放されてしまったと思わざるを得なかった。

フェネルは生まれて初めて現実を恨んだ。

「こちらが魔法使いのガードウィン殿でございます」

魔法の杖を片手に紳士は優雅としかいえない所作で、何やら机に向かつて薬の調査をしていたと思いき老人をフェネルに紹介した。

老人はさして驚いている様子もなかったが、突然のことに不機嫌さを露にしていた。薬匙をテーブルに置いて、静かに紳士に向き直る。

「何事ですか。ツール宰相」

宰相と聞いて、フェネルは傍らの紳士からパツと身を引いた。今の今までただの王室付き執事だと思っていたのだ。ツール宰相とい

えば、国内外で能吏と知られている敏腕宰相である。

「呼び鈴も鳴らさず、年若いお嬢さんを連れて、しかも何処かしらの家具ごとお見えになるとは聞いておりませんよ」

老人の言葉はもつともだった。

フェネルと紳士は、フェネルの家にあった家具ごとこの家——魔法使いガードウインの家に転送されたのだ。広いとはいえ、物が散在しているこの部屋にフェネルの部屋にあった家具が割り込んできたのだから、部屋は大変な混雑具合となっている。

家は古かった。煉瓦造りが主の今の建築とは違い、木と石を組み合わせて作られている。一見、大嵐にでも飛ばされてしまいそうな外見ではあるが、太い柱や頑強そうな石というより岩はがっしりと家屋の形を保っている。古い型の暖炉があり、広い部屋には所狭しと本や何かの機材がびっしりと壁際に置かれた棚に放り込まれており、梁には乾燥した薬草が鈴なりにぶら提げられている。魔法使いの家ならば骸骨の一つや二つはあるだろうと思っていたフェネルは少し毒気を抜かれた。これではまるで田舎の好々爺の家である。

「ガードウイン殿。こちらはフェネル様と仰って、あなたの花嫁候補です」

そう紹介されて、フェネルは殊更大きく首を横に振る。大声で抗議しようとする彼女を制したのは、それまで落ち着いて座していた老人だった。

「待ってください。宰相。私がいつ、嫁を取ると進言しました？」

少なくとも私の記憶にはありませんよ」

無表情な紳士は、意外なことを聞くとでも言うようにわざとらしく肩を竦めて見せた。

「あなたが王に条件を出されたものではありませんか」

「あれは、ただの条件でしょう。私は結婚する気などありません」
落ち着き払った紳士を睨むようにして老人は苦々しく言い放つ。

「では、わたくしがここに連れて来られた意味などないではありませんか」

フェネルは我慢できなくなつて、とうとう紳士に噛み付いた。

「魔法使い様は結婚する気などない。私も先ほどお断りしたばかりですわ。個々人の問題である結婚に双方の同意が得られないというのに、このような徒労を費やすほど宰相様はお暇ではないでしょう？ わたくしは即刻家具を持ち帰り、退散させていただきますわ！」

フェネルの剣幕に紳士は少し押し黙るが、効果のほどがほとんど窺い知れない表情で、彼女に向き直る。

「それこそ、無駄な徒労というものでございます」

「は？」

思わず顔を顰めた彼女を諭すように紳士は冷然と続けた。

「あなた様のお部屋は今日限りを持つて売却されました。住宅移住法第五十条百六十五項目『特殊事情による移住』を参照し、住民票は国庫預かりとなりましたので、即日、こちらに住民登録を移しました。住民登録後は戸籍登録法第三十七条を参照しまして、最低でも一ヶ月、住民登録地での定住が求められます。なお、確かに法的な結婚については個々人の問題と不可侵視されています。法的な強制力を受けませんのでご安心下さい」

つまり、結婚は前提としているがまず一ヶ月この家で暮らせ、というのだ。フェネルはあまりに強引な手引きに開いた口がふさがらなくなつた。

「お待ちください」

紳士に負けず劣らぬ伶俐な声を滑り込ませたのは老人である。

「強制力はない、とおっしゃられましたが、では第五十条の『特殊事情による移住』の適用基準は？ それに適用されたとしても戸籍登録法での『特殊事情移住者の登録』で定住は一ヶ月ではなく、一週間となっているはずですよ。そもそも借家の売却にかかる日数は最低でも三日かかるはずですが？」

それに、と老人は一呼吸おいて続ける。

「私の条件をこのお嬢さんが満たしているとは思えません」

意見だけは老人に賛同していたフェネルは少し息を呑む。最後の

老人の言葉が、反論の切り札なのだ。

魔法使いが出した条件がどんなものかは知らないが、紳士が勝手に選んでつれてきた娘である。フェネルが必ずしも条件に見合うというわけではない。いざとなれば、どんな問題もでっち上げることが出来るのだ。フェネルは出来る限りの応対をざっと頭に浮かべておいた。

だが、紳士は怯むどころか、微かな笑みさえ浮かべて頷く。

「いいえ。私はフェネル様が理想的なあなたの花嫁だと確信しております」

紳士はフェネルに視線を改めて向ける。

「こちらは条件を全て満たしておいでです。フェネル様に不服はありませんが、ガードウィン様に不服を言う権利はありません」

「それは貴方の私見ではありませんか？ 宰相」

魔法使いは食い下がる。しかし、

「はい。私の見解も踏まえた上で判断してよいと下知されておりますので、そのようにいたしました」

外交で辣腕を振るうプロに幾ら魔法使いとは言え、勝てなかった。

老人は唸るように言葉を切ると、諦めたように手を振る。

「すみませんね。娘さん」

意外にも先に謝罪されて、フェネルは少し目を丸くした。だが、彼女は小さく頷く。プロにここまで食い下がったのは褒めるだけの価値がある。

「では……」

紳士は仏頂面に勝ち誇ったような雰囲気を漂わせて、老人とフェネルを見遣るが、老人が彼の言葉を遮った。

「どう考えてもその法律適用は無理がありますから、私が言ったように期間は一週間。一週間、彼女を預かり、今後のことを話し合いましょう。結婚できないと結果ができれば、その判断は不可侵としていただきます」

老人は一枚の紙を取り出すと、何かを万年筆で書き出し、宰相に

差し出した。

「誓約書です。私の言葉が記録されました。それから、フェネルさん」

突然、名を呼ばれてフェネルは瞬きしたが、老人に向き直る。

「貴女はここで見たこと、聞いたこと全てを決して何処へも漏らさないことを誓ってください」

老人は宰相に渡した紙と同じような紙をフェネルに差し出す。紙には、ただ彼女の名前が書かれていた。

「私も一応魔法使いの端くれなので、薬の調合法なんかを同業者に知られると色々と不味いんですよ」

不思議そうな顔をしていたのだろうか。老人は少し苦笑したようだった。

老人はフェネルに紙を手渡すと、自分も紙切れを取り出して、何かを書き出す。

「私も誓約しましょう。この誓約を破ると体が動かなくなる程度の呪いがかかりますが、要は信用の問題ですから」

「確かに」

紳士は紙切れを再度確かめると、懷に仕舞いこんだ。

「三日後、様子見にお伺いいたしますが、雑費もかかりますでしょうから、とりあえずこれをお納めください」

紙切れと入れ替わりに紳士が取り出したのは、小さな皮袋である。テーブルの上に置かれると澄んだ音が鳴った。

「豪気なことですね。たかが一介の魔法使いの問題でしょうに」

中身は金貨だとすぐ知れた。老人は鷹揚に溜息を吐くと、皮袋を紳士の方へと押し返した。

「とりあえずの生活費は私が持ちましょう。無理な生活はしませんから。余計にかかった経費だけ、後ほど請求させていただきます」

ここに来て、初めて紳士ははつきりと苦笑した。

「相変わらずですな。ですが何があるか判りません。問題が起こってからでは私どもでは初動作がどうしても遅れがちになりますから、

どうぞ、予備費として」

紳士は穏やかに微笑むと押し返された皮袋は受け取らず、そのまま杖を手に少し開けた床に立つ。

「問題が発生した場合には必ずお知らせください」

彼は老人からフェネルに向き直り、仰々しく頭を下げる。

「どうぞ、よしなに」

そのまま杖の先で床をトンとつくと、嘘のように紳士の姿は部屋から掻き消えた。

紳士の消えた場所をフェネルは呆けて見送ったが、急に静かになった部屋を見回して改めて緊張する。

この部屋には今、魔法使いとフェネルしかないのだ。

さて、と老人がのんびり立ち上がっただけで、フェネルは咄嗟に近くにあった椅子の後ろに後ずさった。

老人はフェネルを一瞥するが、さして関心もない様子で背伸びする。

改めて見る老人は、長身だった。

ローブを着ているが痩せているのは一目瞭然で、先ほどの紳士のようにすらりとした印象もある。だが、長い白髪と白い髭は顔を埋め尽くしていたので老人以外には見えなかった。

「まずは、あなたの部屋を用意しましょう。日当たりは良い方が好きですか？」

軽い口調で尋ねると、老人は窓際に足を向けた。

「え、ええ。まあ……」

我ながら呆れるほど引き攣った声だ。フェネルは必死に緊張を悟られまいと語調を整える。

「朝日を浴びてから起きられますか？」

老人は窓際から少し離れた。

「ええ……」

フェネルの今まで住んでいた部屋は、四階建ての四階で、朝日がまともに入ってくる部屋だった。早起きのフェネルとしては都合の良い部屋だったが、あまり強く日差しが入る部屋は嫌われるものだ。「高いところは大丈夫ですか？」

今度は今までいた場所から斜めに少し離れて、老人は立ち止まる。「大丈夫です」

高い所ならば、時計塔で暮らしていたこともあるので大体は平気だ。

「わかりました」

老人は頷くと同時に足を踏み鳴らした。床を一度踏み、二度踏み、三度踏むと、地鳴りのような音がガタガタと響いてきた。そうかと思えば、突然、フェネルのベッドや棚が消えた。代わりに、古びたベッドと本棚が部屋の隅にきちんと並んで落ち着いた。

啞然として眺めるフェネルに、老人は一指し指で上を指した。

「あなたの家具は二階に運びました。最近使っていないので、少し汚れているかもしれませんが。二階の廊下の突き当たりに掃除道具が入っていますから、お好きなようにお使いください」

言われてようやく頷き返したフェネルだったが、ふと思いついて老人を顧みる。

「あの、私はこれからどうすれば良いんですか」

「お好きなように、と言いたいのですが、世間様の目もありますから。この家でジツとしていていただくのが良いのですが…」

「そんな……」

困ると言いかけたフェネルだったが、魔法使いの家に住んでいるなどと町の住人に知れたらどうなるかが恐ろしくなった。今まで何とか続けてきていた店仕事も働き口が無くなってしまいかもしれないのだ。

押し黙るフェネルに、老人は軽く手を振った。

「良いでしょう。あなたが出かける時は、私も同行することにします」

「えっ」

フェネルは思わず声をあげて瞬く。こんな目立つ老人を連れて歩けば、魔法使いと同居していることはわからないにせよ何らかの關係があると思われるしまう。

「ご心配なく。この姿で無ければ良いのですから。こう見えて、私も外へ出かける機会が多いので一緒に出かけられると思いますよ」
老人は少し笑ったようだった。

不思議な生活

次の日も晴れていた。

早朝から起き出して、台所に向かう。台所は、田舎には何処にでもあるような釜戸や水場が置いてあり、いずれも綺麗に整頓されている。調味料も料理器具も同様だった。

フェネルはいつものように自分一人分の朝食を作った。パンとベークン、卵の組み合わせは、一般の人間としては裕福な品数だ。野菜サラダとミルクも取りそろえる食卓はフェネルにとって、非常に華やかなものだった。

朝食を終えると仕事へ行く身支度を調べ、家を出る。

そこで、

「おはようございます」

声をかけられるのだ。

朝日に眩しそうに目を細めながら遣ってくるのは、若い男である。長身痩躯で、長い金髪をひとまとめにした軽装の、いかにも行商風のこの男は、魔法使いの弟子だと言った。穏和な笑みを浮かべていれば、人の良さそうな青年に見える。

魔法使いの婚約者という馬鹿げた理由で魔法使いの家に連れてこられて、その次の日、見知らぬ若い男に事情を説明されて驚いたフェネルだったが、二日目には慣れて、三日目の今日には平然と

「おはようございます」

挨拶するようにまでなっていた。

魔法使いの弟子だというのはフェネルに不信感を持たせるのに充分な要素だったが、いつでもにやかな青年に対していつまでもそれは持続しなかったのだ。疑心暗鬼になるのは今でも拭いきれてはいないが。

連れだって街に行き、彼は何処かしらに仕事へ向かい、フェネルもフェネルで店仕事に向かう。

途中会ってしまった同僚は、魔法使いの弟子のことを聞きたがった。

「ねえ、いつのまにあんないい男見つけたの？ 何処の人よ。ここあたりじゃ見かけないわよ」

フェネルはあらかじめ決めておいた言い訳を顔色一つ変えず教えてやった。

「隣街の従兄弟。母さんも父さんも死んだんだけど、親戚で一人だけ面倒見てくれるって叔父さんが出てきたの。彼はその息子さんよ。朝と晩、送ってくれるの。仕事がかつちにあるからって」

いざ、叔父さんと会わせると言われたら、あの無責任な宰相を装させてでも連れてくる。魔法使いと綿密に取り決めたことでもあった。

魔法使いにとっても、フェネルと住んでいるという事実は隠しておきたいことしかかった。

しかし、フェネルは魔法使いの家で彼とあまり顔を合わすことはない。時折、暖炉の前でローブ姿の魔法使いを見かけることがあるだけで、彼もフェネルに声をかけることはない。ただ、二、三言、他愛もない話をした覚えがあるかないかぐらいだ。

『食事、どうしてるの？』

居候の自分一人だけ食事していることが不気味だった。

ただ、それだけで魔法使いに話しかけるのには勇気があることだったが、黙って隣にいれば、一般人とかわりがない。話しかけなくなるのも人のサガというものだろう。

暖炉の前に腰掛けていた魔法使いはフェネルに向かって顔を上げる。

『食べていますよ』

殊更に不快感を表すのでも、嘲笑するのでもなく、魔法使いはやんわりと笑んだ。

『何か不都合でもありましたか？』

そう問われると応えに窮する。だが、フェネルは何とか答えようと言葉を絞り出した。

『魔法使いは食べなくても生きていられるのかと思ったの』

そう言うと、魔法使いは苦笑した。

『魔法使いは、あいにくと仙人ではありませんので。霞を食べているだけでは生きていきません』

フェネルは返答を不思議と当たり前のように受け入れていた。一般論では魔法使いは悪魔と同じで、人間が食べるものを受け付けられないという。フェネルも当然のようにそういうものだと思っていたのだが、ここにきて、魔法使いが普通の人間と変わりがないのではないかと思い始めている。

しかし、それでは何百年も生き続けている説明がつかない。

興味深いことではあるが、尋ねて応えてくれる可能性は低いと思われる。

魔法使いはフェネルにあまり姿を見せないようにしている節がある。それはフェネルが怖がっていることを考慮してのことなのだろうか。

（それにしては、異常なのよね）

奇麗に整頓された台所、金髪の若い男、誰もいないような家。

共に暮らすと公言したわりにフェネルと魔法使いの接点はあまりにも少ないのである。

それに、魔法使いの家の中で、彼の弟子と出会ったことがない。

別の場所に住んでいるのだと、自分で納得させているが、教えるこうはずの弟子が師の家に全く寄りつかないというのは奇妙な話だった。

もしかして、フェネルの知らないうちにやって来ては帰っていくのかもしれない。だが、広くもない家の中で出くわさない方が不思議だ。

「フェネル」

隣で作業台に向かっていたはずのリーザイルがカウンターから呼びかけてきた。小太りでおおらかに笑うこの女性が一人でこの店を切り盛りする店主である。

「バリーさんよ」

フェネルが働いているのは、菓子屋である。大きくもないが小さくもない、街ではちよつと名の知れた砂糖菓子店で、幾つかの支店も出している。色とりどりの砂糖菓子を売るのはリーザイルとフェネル以外に三人。今は細工を作っているフェネルを残して、二人は出前に、一人は竈に向かっていた。

「バリー？」

招かれてカウンターに顔を出すと、金髪の弟子がにこやかに手を振った。

「まだ仕事は終わってないわよ」

フェネルがぶっきらぼうに言っていると、弟子、バリーはきょとんと首を傾げた。

「お忘れですか。フェネルさん。今日はお客様がいらっしゃる日ですよ」

「あ」

今日は、フェネルを魔法使いの家に無理矢理押し込んだ張本人、トール宰相が様子を見に来る日だった。

この日までに何とか欠点や不満を見つけておこうかと思ったのだが、当たり障りのない魔法使いの応対にすっかり失念していた。

「三日前に自分で言ってたじゃないか。珍しくぼんやりしてるねえ」意味ありげにリーザイルが笑うので、フェネルは大きく溜息をついた。

「環境が変わったので、ちよつと寝不足なんです」

嘘ではない。だが、寝不足なのはバリーよりも先に街へ行つてやるうと躍起になって早起きしているせいだ。

「眠れないわけでもあるのかい？」

フェネルはなおも勘繰るリーザイルを置いて、荷物をまとめて店

を出た。

煉瓦の敷き詰められた街路を歩いていると、ふいにバリーが顔を覗き込んできた。

この男、よく見れば目が赤い。まるで血を閉じこめた紅玉のようだ。

なるほど、魔法使いの弟子のわけだ。

自分の魔女めいた水銀の目を棚に上げて納得していると、手が伸びてきてフェネルの額にピタリと据えられた。

視界が一瞬真っ白になる。

「熱はないようですね」

ひんやりとした手のひらがふいに離れると、フェネルはようやく自分が息を止めていたことを知った。

新しい空気を求めて、フェネルはそつと自分の胸に手を当てた。

「……なんですか？」

「ああ、いえ。突然、すみません」

バリーはフェネルの反応に驚いたのか、頬をかいた。

「寝不足でいらつしやるとは気づかなかったものですから。具合がお悪いのかと」

「気になさらないで」

まさかアンタより早起きしたかったとは言えない。フェネルの本音を知ってか知らずか、バリーは肩を竦めた。

「そうはいきませんよ。あなたはお預かりしている大事なお客様です。何かあつてからでは、私がしかられてしまいます」

屈託無く微笑まれば、黙って頷くしかなかった。フェネルの嘘のせいでこの弟子が魔法使いに叱責されるのはあまり気持ちのいいものではない。

フェネルの返事に満足したのか、バリーは街路の周りに陳列している店を見回した。

「フェネルさんの店でクリームケーキを買いましたから、紅茶でも買っていきましょか」

紅茶は貴族の嗜好品である。今では貴族のみの特許品ではないが、一般市民には高値の花だ。

紅茶の専門店には、やはり身形のいい貴族の婦人達が集まっていて、フェネルやバリーのような庶民の服装は異様に目立った。別段、気にするわけではないが、暇を持て余しているらしいご婦人方の視線は痛い。

だが、バリーはそんな視線も感じないのか、店で一番高そうな良質の茶葉を買った。

ドアベルに見送られて店を出てから、フェネルはバリーを見上げた。

「何ですか？」

「……魔法使いつて儲かるんですか？」

バリーは楽しそうに笑った。

何をそんなに笑えるような質問をしたのだろうかとフェネルは眉根を寄せる。

「変なことを聞きました？」

「いえ……」

笑い納めたバリーは手に抱えたケーキの箱と紅茶の入った紙袋をフェネルに手渡す。

「たくさん仕事をしていれば、それなりに。でも、多分、フェネルさんの月給と変わりないでしょうね」

手渡された箱と袋とバリーを見比べて、フェネルは目を瞬かせた。「変わりがない？ あれだけ薬を作って？」

詳しい魔法使いの仕事は知らない。だが、毎日、バリーが抱えて出てくる箱にはいっぱい薬が入っていることは知っていた。バリーは魔法使いが街の人に依頼を受けて作った薬を配っているのだ。

「はい。規定の料金表があるわけではありませんし。場合によってはお金をいただいています」

ただのお人好しだ。

フェネルの表情を読んだのか、バリーは苦笑した。

「お人好しでしょう？ 私もそう思いますよ」

街を出ると、大きな道がある。だがその道を逸れて、小さな林道に入った。大通りに人は多いが、不思議なことに誰一人としてこの林道に気づいた様子の者はない。まるで忘れ去られた道だった。

木漏れ日と小鳥の鳴き声が響く道は、まるで胎内のように熱くもなく寒くもない。

ざわざわという胎動のような木々のざわめきを聞きながら林を抜けると、小さな家が見える。

こじんまりとしていながら、石造りのどっしりと土地に根付いている古い家。魔法使いの家である。

「では、私はここで」

いつもバリーとはここで別れている。来た道に戻っていく彼を見送り、フェネルは魔法使いの家へ向かう。

林を抜けたと言ってもそこには僅かな野原があるだけで、周囲は広大で深い森に囲まれている。

そのほぼ中央に建っている家は、外界から取り残されたようにも見えた。

フェネルはノックもせずに家へと入る。普段はそこに誰もいないのだが、今日は三揃えのスーツを着込んだ紳士が優雅にダイニングの椅子に腰掛けていた。

彼はフェネルを見つけると、折り目正しく礼をした。

「お久しぶりでございます」

「…あ、こちらこそ！」

フェネルは勢いよく頭を下げた。

「つつがなくお過ごしのように安心してしました」

「あー……まあ」

問題の起こしようなないほどつつがないのは本当だ。

「ご不在でしたが、失礼とは思いつつ中で待たせていただいております。お許し下さい」

「いえ。……私がここの家主ではありませんから……」

そう言ったフェネルに紳士、トールは苦笑いしてみせた。

「まだ、そうではございませんでしたね」

たぬきジジイ。

「そういう寝言は寝てから言っていたくださいませ」

フェネルの代わりに悪態をついたのは、書斎から顔を出した魔法使いだっただけ。

彼の姿を見るのは日に何度も見るわけではないのだが、いつ見ても同じようなローブ姿だ。一見表情のわからない顔からは白い髪と髭がいつも通り覗いている。

「お忙しいようですね。大丈夫ですか？」

トールに微笑まれて、魔法使いは憮然と紳士を睨んだ。

「おかげさまで。薬の調合が残っておりますので、少しお待ち頂けませんか？」

「承知いたしました」

魔法使いはトールの応えを聞いてから、再び書斎のドアを開く。

「フェネルさん」

珍しく呼びかけられて、フェネルはびっくりと魔法使いを見遣った。

「な、何ですか？」

「買ってきた紅茶とケーキを先に食べていてください」

言ったきり、魔法使いは書斎に消えた。

「……何で知ってるんだろ……」

魔法使いを見送ってから、フェネルはぼつりと漏らしていた。

どうして、話もしない紅茶とケーキのことを知っていたのだろう。だが、魔法使いなのだから判るのだろうと根拠のない理由を考える。

ふいに失笑が聞こえた。

振り返ると、トール宰相が口元を押さえていた。

「いや……。失礼」

何を笑っていたのだろうか。不思議の思いがフェネルは質問しなかった。

「すみません。今、紅茶いれますね」

「あなたは本当にガードウィン殿に相応しい方の方ようです」

「……は？」

話題がちぐはぐだ。フェネルの困惑を察したのか、トールは頷いた。

「魔法使いというのは、仙人の類でも化け物でもありません。魔法自体、不思議な術ではなく、しかるべき法則に従った技術です。我々の間では魔法使いというのは、魔法を公使する操者というよりむしろ魔法を研究する学者という印象が強いのです」

「……つまり、魔法使いはただの人間だと？」

応えると、トールは満足したように口の端を上げた。

「ガードウィン殿は、一つ、あなたに嘘をついています」

フェネルは少し眉根を寄せた。だが、トールは呪文のように続ける。

「確かめてみては、いかがですか」

魔法使いの秘密

だから、何だというのだ。

フェネルは我知らずしかめ面で一人きりの夕食を終えて廊下を歩いている。

トールの言うとおり、魔法使いは何かしら隠し事が多いようだが、それをフェネルが知って、何の役に立つというのだろうか。

フェネルは必要以上に魔法使いのことを知りたいと思っていない。確かに、魔法使いが案外、紳士的で温和だということがわかった。だが、そんなことを自ら進んで知りたいと思っていたわけではない。フェネルにだって、人並みの好奇心はあるから、何日か暮らしているうちにいくつかの疑念だって湧いてくる。

あの魔法使いは、白い髭と長い髪に覆われていて一見、老人に見える。

だが、その言動に老いたところが見られない。むしろ、若者のように思えるのだ。そこが魔法使い所以かもしれないが、フェネルと同じように食べて寝ているのなら、等しく老いの法則に倣うはずである。不老長寿なら、わざわざ老人の格好をする必要はない。威厳を見せるのなら、もっと相応しい紳士の姿でもしていればいいのだ。他の疑問も合わせれば、魔法使いは矛盾だらけだ。

しかし、フェネルはそんなものを暴きに來たわけではない。

迷いがない、といえば嘘になる。

そんな心境だったからこそ、フェネルは思わず二階の自室に向かう足を止めていた。

話し声がする。

それも、魔法使いの書斎から。

普段は足早に去るはずの部屋のドアが少しだけ開いている。

「全く……迷惑なだけですよ」

バリーの声だった。

珍しく、フェネルが起きている時間に弟子が訪問しているのか。フェネルはそつと息を殺してわずかに開いている隙間から除く。ローブが見えた。魔法使いがドア側に座っているようだ。だが、聞こえてくるのはバリーの声のみである。

「婚約者だなんて、ロータスもつくづく物好きだ」

「そう仰られますな。ロータス様はあなたの将来を憂いておいでなのです」

応えたのは、夕方に帰ったはずのトール宰相の声だった。

「あなたの師が亡くなってもう七年が経ちました。そろそろ良い機会ではありませんか？」

師が、亡くなった。

フェネルは不思議な会話を理解しようと忙しく脳裏を巡らせる。では、ここにいるあの魔法使いは誰なのだ。

「だからと言って、あんな娘を巻き込むことはない」

少し苛立ったバリーの声に、トールの声は相変わらずの無愛想で応える。

「整然、師は仰っております。自分が死んだ後、あなたがここに囚われはしないだろうか、と。そして、それは現実になってしまった」

「……それは私が決めたこと」

「そう。ロータス様があなたをここに縛りつけてしまった。それがわかってしまったからこそ、あなたには必要以上の心配をしてしまいうのです」

「いい迷惑です」

バリーの語気が荒くなり、何故か頭から被っている魔法使いの口ーブに白い手がかかった。

そしてバサリと剥ぎ取られる。

現れたのは、長い金髪。

ランプの光を受けて月光のような淡い光を放つ。

「ロータスにお伝えください。私は何も後悔をしていないと」

凜と言い放った横顔は、まぎれもなくバリーだった。
訳がわからない。

今まで魔法使いだと思っていたのがバリーだったのか。ならば、
本物の魔法使いは何処に行ったのだ。

まさかフェネルがここにいることを嫌って何処か引越したのか。
ちょうどその時。

片手が思わずドアをついた。

小さな軋み。

だが、それは室内の二人を振り向かせるのに充分だった。

バリーが目を見開く。

彼の唇が咄嗟に言葉を紡ごうとして、

「ガードウイン殿！」

制止するトールの声。

それと共に、ドアが弾けた。小さな火花を散らして焼け焦げる。

辛うじて尻餅をつかなかったフェネルは、改めて正面を見据えた。
ドアが完全に開いて、その先でバリーが言い分けを探すような困
惑顔でこちらを凝視している。

驚いているのはフェネルの方であって、バリーがまるで殴られた
子供のように泣きたいのか怒りたいのかわからない顔をするのはど
う考えても理屈にあわない。

反則だ。

そう考えると、この不条理が突然、腹立たしいものに思えてフェ
ネルはバリーを睨みつけた。

少し怯えたようにあとさったバリーはなおも言い訳の糸口を探
して視線をさまよわせる。

「……契約にはないわね」

我ながら低い声だった。

だが、それは幸か不幸か、バリーと奥のトールを気圧するのに効果
があった。

「私がこの状況に説明を求めるのに、何の誓約もないはずよね？」

静かな詰問に、バリーは明らかに顔をひきつらせて頷いた。

改めて自己紹介

金色の髪を無造作に束ねて、何の変哲もないブラウスにカーディガンを羽織った姿は何処からどう見ても普通の青年だった。

背が高いことと少しばかり整った容貌を除けば、街を歩いていても異様さなど感じられない。禍々しくさえある紅玉の瞳も、彼の平凡さに飲み込まれてしまう。

「改めてご紹介いたしましょう」

リビングに火をいれて、トールと三人で広いテーブルに座した。各自の前にはフェネルが入れたココアがある。

「こちらが魔法使いのガードウィン殿です」

トールが顔を向けたのは、バリーと名乗っていた金髪の青年である。

困惑気味に、魔法使い、ガードウィンは顔をあげた。しかし、すぐに頭を下げる。

「すみませんでした」

唐突に謝られて、フェネルは啞然とした。だが、それがガードウィンにわかるはずもなく、頭を下げたまま続ける。

「私はこのまま一週間あなたを騙すつもりでした」

「……ああ、そのこと……」

ようやく飲み込めてきたフェネルは鷹揚に頷く。先ほどまでは何に対してかわからないほど怒りを感じていたのだが、ココアを飲んでしまつともう、自分の中でほとんどわだかまりがない。フェネルは自分の醒めやすさに呆れた。

「私も悪かったわ」

今度はガードウィンが驚いたように顔をあげた。

「わざわざ芝居うつてまで、関わらせないようにしてたのに、私が覗いたりしたから計画が潰れちゃったわけでしょ？ ごめん」

「ごめんで済まされることではないのだが、ガードウィンは訳がわ

からないというように眉根を寄せている。

それはそうかもしれない。一時前まで、激昂していた相手が今は物分りよく謝りさえしているのだ。だが、フェネルにしても、怒ってもいない相手を怒鳴りつける趣味はない。

かたわらで様子を見ていたトール宰相が含み笑いを漏らした。

「……いや、失敬。しかし、フェネル様は素晴らしい御方ですな」
今度はフェネルが顔をしかめる番だった。

「怒る必要もないのに、怒る趣味はありません」

「泣くとか、叫ぶとか、他に選択肢はいくらでもあるでしょう。なのに、あなたは謝るという選択をした。実に素晴らしい」

確かに、いくらでも選択肢はあったはずだ。だが、結局フェネルが選んだのは、泣くでもなく、怒るでもなく、ただ素直に謝るということだけ。自分でも不思議には思うが、それが正直な感情だったのだから、仕方が無い。そう告げると、トール宰相は目を細めて無愛想な笑みを作った。次に彼が口走りそうな言葉が思い浮かんだので、フェネルは早々に話し相手をガードウィンに戻した。

「そういえば、どうしてあんな格好を？」

まるで老人にしか見えない、魔法使いの格好を、わざわざする必要があったのか。

ガードウィンは苦笑する。口の端を上げただけの笑みだったが、それだけで彼の周囲の空気が和らいだ。

「リユーネリア王家に仕える魔法使いは、代々あの格好を。魔法使いとして少しは箔がつくでしょう？」

そうかもしれない。隠者のような格好は、それだけで信憑性がある。

「王家に仕える魔法使いは、ガードウィン殿で五十二代目です」

トール宰相の生真面目な補足で、あ、とフェネルは合点する。

魔法使いが何百年も生き続けているというのは、同じ格好の魔法使いがいるからだっただけだ。

「そんなことしなくても、あなた、街の人にも色んな薬を作っ

げてゐるのに。格好なんて……」

今度こそ、ガードウィンは困った様子で肩を竦めた。

「ナイショですよ。これは誓約になりますから」

初めて会った時と同じ、穏やかな声音だった。

そう。ここで見たこと聞いたことは、決して口外しない約束だ。

フェネルは改めて頷いて、失笑する。

「でも、弟子だなんて……。私、毎朝、あなたより早く起きようとしてたのよ？　起きるの大変だったでしょ？」

「おかげさまで。近頃寝不足です」

たおやかに微笑みながら話せば、貴族達の集う夜会に出てもすぐに馴染むだろうと思われた。だが、その優男の容姿とは裏腹に、ガードウィンの口調は何処か不器用で、生真面目だ。

「その姿で行けば、娘さんにモテるのよね？」

面白半分に尋ねれば、彼は少し目を細めて顔をしかめた。

応えたくないようだ。しかし、隣からトール宰相が相槌をうつた。

「ええ。夜会に出られてもあまりにご婦人方の興味を一身に浴びられるので、主催者側から出入りを禁じられてしまわれました。それに、街でも薬の受け渡しの時に幾つもの恋文をいただいているとか……」

「……トール宰相」

このままではあらぬことまで喋られそうだと感じたのか、苦々しくガードウィンが口を開く。

「夜会に来るなといわれたのは幸いでしたよ。あんな魑魅魍魎の棲家に行くのは二度とごめんです。それに、ラブレターなんて受け取っていません」

「受け取る前に断っておいですからな」

「……………」

付け加えられて言葉を失うガードウィンを尻目に、トールは優雅にココアを飲んだ。

気まずそうにフェネルも見遣るので、彼女は思わず微笑んだ。だ

が、それも束の間で、少し醒めた。

「——どうして、私の前にその姿で出てきたの？」

本来ならば、一番初めに聞いたかった質問。だが、尋ねる気は失せていた。だから、気が緩んでしまったのか。

ぼつりと呟いた言葉を受けて、ガードウインは少し視線を反らした。

逡巡するように、目を伏せたまま、口を開く。

「あなたと少し話がしてみたかった」

聞きようによっては、好意をもっている、と言っているような言葉だ。しかし、この口下手な魔法使いはただ漠然とした事実を述べているだけだ。

「魔法使いの姿だと、あなたは警戒するでしょう？」

わずかに視線を投げられて、フェネルはためらいがちに頷いた。怖がっていたのを知っていたのだ。

「でも、私はこの姿で名乗るつもりは毛頭なかった。——今となつては、あなたにお話するべきだと思うので、お話していますが……。そんな私情もあつて、弟子という架空の人物をかたりました。実際に、私は弟子だということでも街でも通っています」

不器用で口下手。それでも彼は誠実だ。ここ数日での印象だった。「……それで、話してみてもうだった？」

尋ね返すと、ガードウインは苦笑する。見慣れた柔らかな笑みが少し陰って見えた。

「あなたは、少し感情に走りやすいところがあるけれど、とても素直な方ですね」

「大変だった？」

「楽しかったですよ」

そう言つて、ガードウインは目を閉じる。

「久しぶりに、人と話せた気がします」

嘘ではない。

そうわかれば、フェネルは満足した。

「私も楽しかったわ。一時とはいえ、こんな贅沢な暮らしをさせてもらえたんですもの。ありがとう」

礼を言ってしまうと、まるで別れの言葉のようだ。

だが、ガードウィンはそれを待っていたかのように目を開いた。

「フェネルさん。やはりあなたのような方をここへ留めおくことはできません」

覚悟はしていた。だが、不思議と寂寥感が胸をついた。

「……申し訳ないが」

トール宰相が咳払いした。

「あと四日は暮らしていただきます」

その言葉に、フェネルとガードウィンは顔を見合わせて苦笑した。

不思議なひと

彼女は、不思議なひとだ。

ガードウィンは改めてそう思った。

清らかな月光を思わせるような白銀の髪はすんなりとしていて彼女の性格を表すようでもあったし、磨かれた湖面のような深い水銀の瞳にははつきりとした知性と思慮があり、実際フェネルは賢い女性だ。

突然襲われた運命のいたずらにもめげず、噂にも囚われないでガードウィンの本当の姿を見つけ出した。

宰相を交えて、くだらない話ばかりをしていて、ココアを飲み終わる頃、彼女は幼いころに両親を亡くし、それから働いてばかりだと笑った。必死に働いて、ようやく読み書きと簡単な計算を覚えたのだというフェネルの手は少し骨ばっている。年頃の娘としては情けない、と彼女は言うが、それがどうして美しく見えないのが、ガードウィンには分からなかった。

しなやかな、それでいて細い手は確かに可愛らしいというのに。

彼女を初めて見たときから、宰相の言う“条件”に当てはまっていることはわかっていた。

だからこそ、彼女には自由になってほしいと思う。

そう願っているというのに。

ぐらりと傾いだ彼女に、ガードウィンは戦慄した。

抱きとめて、熱があるのだと分かってからも、そのさざ波は心のなかでざわめき続けていた。

触れている指先から、移ったのかと思うほどの熱をもって。

手のひらと熱と

もしかしたら、自分で思っていたよりも気を張っていたのかもしれない。

そうでなければ、ありえないのだ。

フェネルが熱を出してしまうなどということは。

ココアを飲んでいて、しばらく魔法使いと宰相と一緒に机を囲んで他愛のない話（確か目玉焼きの焼き方についてだ。フェネルは半熟が好きだが宰相は両面焼くそうだ。世の中は広い）をしていたら、唐突にフェネルは意識が遠のいた。

それは本当に突然で、とっさに自分の体をどうにか持ち直すことも、持余し気味だった空のマグカップを避けることも自分では出来なかった。

だから、次に目を覚ました時に、ここ数日で見慣れた天井が見えることにも、見慣れない金髪がこちらを覗き込んでいることにも、不思議なことにフェネルは驚きはしなかった。

予想以上に重い体が自分のベッドに沈みこんでいる。

これは相当にひどい熱だ。

目の合った赤い瞳に謝罪を口にする。

「ごめんなさい」

思いがけない掠れた声の方にフェネルは驚いた。

そんなフェネルに向かって、金髪の青年はほっとしたように微笑

んだ。

「気分はどうですか？」

滑らかで穏やかな声だ。

聞いているこちらの方が安心するような心地がする。

そんな不思議な感覚にも内心驚いて、フェネルは少しかだけ視線を逸らした。

「お仕事先には休むと報せておきましたから、今日一日は静かに寝ていてください」

仕事！

なんとしたことだ。

思わず枕から顔を上げようとしたフェネルだったが、やんわりと額を押されて再び天井を仰ぐ。

「まだ熱が高いですよ」

大きな手だ。

片手でフェネルの額を覆ってしまうほどの。

まるで、自分が小さな子供に戻ってしまったかのような錯覚に陥りながらも、フェネルは再び紅い双眸を見上げた。

「……私、今月やばいのよ」

家賃が突然いらなくなったのはこの一週間だけのことだ。勝手に部屋を解約されているから、出ていくには新しい部屋を探さなくてはならない。

仕事をしながら部屋を探すには、意外と体力が消耗していたようだ。

フェネルの心配を知ってか知らずか、ガードウィンはおっとりところを見下ろす。

「体がちゃんとしていなくては、何もできないですよ」

彼は、知っているのだろうか。

フェネルがこの家から、一刻も早く出て行きたがっていることを。

でも、と思う。

きっと、彼は知っても知らなくても、フェネルをこの家から出すつもりだ。

ガードウインの視線はいつだってフェネルを自分の境界線に入れようとせず、そしてそれはフェネルも同じだ。

「何も心配はいりませんよ」

そう言っつてフェネルの額を柔らかに撫でるガードウインは錯覚を起こしそつになるほど優しい。

フェネルを本当に、心配しているかのようで。

どう返して良いのかわからず、フェネルは何も答えないまま目を閉じる。

——ふたたび意識を取り戻すと、魔法使いは忽然と姿を消した。

残された不安

あなたは元の生活へ戻るといい。

ほとんど初めて見る字だったが、これほどわかりやすい簡潔な手紙を書く人物を、フェネルは他に知らなかった。

ガードウィンが姿を消すと、フェネルは本当にすぐに元の生活に戻った。

手紙を見てぼんやりとしたままいつものように朝食を摂ってすぐ、トールが姿を見せたと思うと、彼は事務的にお試し期間の終了を告げた。そしていつかの契約通り、フェネルの新しい住居を用意してくれ、すぐさまあの不思議な手品で荷物ごと彼女を送り届けてさえた。

しかし、ガードウィンの消息だけ一つも語らないまま。

気にならないといえば、嘘になる。

気難しいくせに優しい魔法使いは、両親以外でフェネルが初めて共に暮らした人だ。礼儀正しくて頭はいいのに、要領の悪い彼に親しみも沸いた。

けれど、結局本当に信じられるものが己しかないフェネルにとって、少しばかり一緒に暮らした彼をよすがにすることは出来ない。今までも、これからも、フェネルにとって頼れるものは自分だけだし、ガードウィンもフェネルとずっと暮らすつもりなどなかった。

のだ。

そして仕事場である菓子屋に近い、前よりも日当たりの良い少しばかり広い部屋で体調を取り戻したフェネルは、いつものようにパイの生地を作っている。

（そういえば、魔法使いと住んでいたのに、ほとんど魔法なんて見られなかったわ）

魔法を使ったことと言えば、契約の時とフェネルの荷物を移動する時と、フェネルが覗き見をしようとした時だけ。

あとはほとんど薬売りのような生活をしていた。

冷たい手からは薬の匂いがうつすらとして、フェネルを見つめる赤い瞳はいつも穏やかだった。

パイ生地を型に流し込みながら、フェネルは苦笑する。

どうやらトールの思惑に未だはまっているらしい。

一国の宰相と連絡をとる手段など持ち合わせていないが、突然居なくなってしまうと、気になるというものだ。

きつと、彼のことから何所かで元気に暮らしているとは思っているのだが。

フェネルはそう思うことにしてパイ生地をオープンへと押し込んだ。

「いやだねえ」

たっぷりとしたクリームをスポンジの上に乗せていたフェネルの耳に店の主であるリーザイルが客と話している声が聞こえてくる。

「隣の国とまた戦争だって？　まだ男たちが徴兵されるまでは悪くなっちゃいないようだけど」

スポンジを被せてクリームをまた重ねることを繰り返しながら、フェネルは唐突に不思議に思った。

戦争の話はフェネルも知っている。街で配っている号外ぐらいは読めるのだ。けれど、

いったい、誰が戦争をしているんだろう。

この国では戦争をしていることを隠したりしない。隣の国と昔から折り合いが悪く、領土や水の問題で小競り合いを繰り返しているけれど、少なくともフェネルが生まれてからこのかた、この国が戦火に焼かれたことは一度もない。

城にたくさん抱えられている騎士や兵士たちが出兵するとなったら、街の中を通らない道はない。だから、街中が大騒ぎなるはずだ。

赤い木の実を持つ手が震えた。

けれど取り落とすことはしないまま、フェネルはいつもの作業を繰り返す。

木の実を等間隔にクリームの上に乗せれば特製のケーキの出来上がりだ。

慣れた作業を繰り返しながら、フェネルは気付いてしまった不安を打ち消せないでいた。

この国で、魔法使いは嫌われている。

部屋は骸骨だらけだとか、墓を掘り返しているだと、怪しい薬を作っているだとか。そんな噂に彩られて。

けれど、建国されてからたかだか三百年ほどの国の中で、すでに魔法使いだけ五十二代目。王様だってせいぜい十八人目だというのに。まともに学校にも行ったことのないフェネルだって知っている。

少ない知識から手繰り寄せると、何故か恐ろしいことが頭に浮かんだ。

フェネルは仕事の終わりを待って、城へ出かけることにした。

ガードウィンが姿を消して、すでに一週間が経とうとしていた。

疑惑の城

街が夕暮れに赤く染まる頃、フェネルは城の門の前へとやってきた。

不審そうにフェネルを見る門番は、今戦争が起こっていることなど感じさせないほど、のんびりしている。

この国では市民が意見書を出すことが許されているから、フェネルのような若い娘が城の門までやってくることは珍しいことではない。

けれど、夕暮れ時にはみんな家へ帰る時間だ。交代したばかりの夜勤の門番たちは赤い夕焼けを受けているというのに、顔色の悪いフェネルを見て訝しげに様子を伺う。

フェネルは声が震えないように門番へと話しかけた。

「お願いでございます。トール宰相にお目通りを」

静かな細い声を聞きとって、けれど門番のひとりは首を横に振る。「だめだ。明日にしる。宰相はお忙しい方だが、意見書に宰相へのお目通りを願えば叶えて下さることもある」

厳しい言葉だが、門番の声音はフェネルを気遣うものだ。

そして願えば、宰相への目通りも叶うというのは本当のことだ。

他の国では貴族と平民が厳密に隔てられていて声をかけることすらできないというのに、この国ではその壁は限りなく薄い。以前はそういう風潮もあったようだが、前王や現王が辛抱強く徐々にしこりを取り除いてきたのだという。

それでもフェネルは繰り返した。

「お願いでございます。宰相にお目通りを」

「だめだ。……日も暮れる。お前のような娘が一人で歩いていい時間ではなくなる。今日はもう帰るといい」

良い国だ。

フェネルのような孤児にも優しく、フェネルは望まなかったが、孤児も望めば学校にだって行ける。兵士も騎士も街では気のいい人氣者だし、貴族も特別に市民を虐げるような者はいない。

フェネルは泣きそうになりながら訴えた。

「今すぐでなければならぬのです。トール宰相に一刻も早くお目通りをお許してください」

そして、今までの自分であれば決して口にはしなかったことを、フェネルはすでに震えた声で静かに告げた。

「宰相にお取次ぎください。……わたくしは、宰相さまに魔法使いガードウィンさまの花嫁候補として選ばれておりました者です。かの魔法使いのことでお話がございます」

ほの暗い影の中で、フェネルは言いようのない淀みの中に放り込まれたような感覚に陥った。

街の建物の影へと沈んでいく太陽の最後の光がフェネルの影を伸ばしていく。

時が止まったかに見えたのはほんの一瞬で、門番の低い声であったという間に動き出した。

「……お前は魔女か！」

二人の門番はフェネルの長い銀髪をつかんだかと思うと、彼女の細い腕をひねりあげた。

抵抗もままならないまま、フェネルは痛みの中でぼんやりと思った。

（そういえば、私の髪も瞳も、珍しいのだったわ…）

促されるままに城の中へと引きずり込まれ、フェネルは冷たい夜が落ちようとしている整然とした石畳を歩かされる。

「——何をしているのです」

静かな声に顔をあげると、執事然とした杖を持った紳士が記憶と変わらない顔でフェネル達の正面に立っていた。

一国の宰相が、きつと牢があるのだろう城のはずれに突然現れたのだ。

兵士たちは恐縮して声を張り上げた。

「この娘、かの悪名高き魔法使いの花嫁候補だと名乗っております、きつと危険な魔女だと思われるので連行しております！」

トールは兵士を見、そしてフェネルを見てから静かに告げた。

「彼女は私が選り出したお嬢さんです。客人としてお招きしますので、そのように」

兵士たちは戸惑いを隠せないようだったが、フェネルの腕を離してトールへと突き出した。トールは兵士たちにこのことを口外しないように命令すると、フェネルについてくるよう促す。

「——知らぬこととはいえ、手荒な真似をしてしまい、申し訳ございませんでした」

城の回廊へとフェネルを招きいれながら、トールはいつもの平板な声で話した。

「この国では、魔法使いというものは恐れられています。……聡明なあなたであれば、おいそれと口に出すことはないと思っていたのですが……」

城の中だというのに誰ともすれ違わないことを不思議に思いながら、フェネルは今までひねりあげられていた自分の腕をさすった。よほど力を入れられていたのか、手の形の赤いあざになっている。

「……それなら、どうして宰相様は恐れられていないのですか？」

トールは「おや」というような顔をして、目を細めた。

「それも、この国では禁句にあたるのですよ」

物の道理もわからない子供を諭すようにいわれ、フェネルは口を噤む。

フェネルをいとも簡単に黙らせたトールは、一度では決して覚えられないほど幾つもの回廊を通り、大きな扉のついた部屋へとフェネルを招いた。

結局、そのあいだもただの一人の使用人の姿も見かけなかった。

部屋ではすでに暖炉が温かく部屋をともし、天井にはおしげもなくシャンデリアが下げたある。いつもランプで過ごしているフェネルにとっては、夜ではとうていあり得ない明るさだ。飾棚と布張りのソファセットとテーブルしかない部屋だが、毛足の長い絨毯はトールの上等な靴の足音さえ吸うほど柔らかい。

この部屋だけでも、フェネルを畏縮させるのに十分だった。

今更ながら居心地悪そうにドアの前で立ちすくむフェネルに、トールはソファを勧める。

白い手袋の誘いを断るように、フェネルは意を決して切り出した。

「今日は、宰相様にお伺いしたいことがあって、参りました」

トールは表情の分からない顔で手袋を手の杖へと戻してフェネルを見つめる。

読み取れるはずのない宰相の顔を見ながら、フェネルは思った。

きつと、彼は自分の質問をわかっている。

けれど、フェネルは質問を投げることにした。

「魔法使い様は、いったい何処へ行つたのですか？」

辣腕を揮う宰相は、眉ひとつ動かさないまますぐに応えた。

「それをあなたが知れば、私はあなたを殺さなくてはならなくなります」

嘘と真実

まるで明日の天気でも占うように、トールは静かに言った。

「もしもあなたが、あなたが知る以上のことを知ろうとなさるのであれば、私は法をもつてあなたを殺さなくてはなりません」

凧いだ湖面のようにフェネルを見つめるトールを、フェネルも静かに見つめ返した。

優秀な宰相からは何も読み取れないが、彼はすでにフェネルに答えを出している。

トールはフェネルの頭にある質問と答えを知っている。

だからそれを口にすれば、フェネルは死ぬことになる。

それはこの国の誰も知ってはならない秘密。

魔法使いが、戦争に駆り出されているということ。

フェネルが知ってどうなることではない。

けれどフェネルは唇を噛みしめた。

どうにもならないことが、どうしようもなく堪らないことがある。戦争がすぐに終わるわけではないし、もしもこの国が焼かれるようなことになればもっとたくさんの人がフェネルのように嘆くだろう。

ただ今はあの魔法使いが一人ぼっちでいるだけで。

それが、悲しくて仕方なかった。

「——あなたはなぜ、魔法使いが恐れられているか知っています

か」

フェネルの様子を眺めながら、トールは語り出した。

「他の国にも魔法使いは居ます。彼らは宮廷に抱えられて役職についています。」

けれど、この国では違う。歴代の魔法使いはずっとあの家で暮らしてきました」

街から外れた古くて淋しい一軒家。

古いためなのか幾ら掃除をしても埃の尽きない家だったが、太い梁の渡されたどっしりとした家を、フェネルは嫌いではなかった。

「この国が出来た頃、一人の魔法使いが居ました。彼は王によく仕え、よく諭し、王の良き友でした。しかしある日、隣の国から彼に誘いが来た」

脈絡のない昔話でもするように、トールはフェネルから視線を外して暗い夜の降りた窓の外を眺めた。

「彼には一人の息子が居ました。妻を建国の時の戦争で亡くし、彼らはたった二人きりの家族でした。隣の国の国王は、自分の国に来るならば、彼の息子にも素晴らしい地位と領地を与えようと言いました。子供の幸せを願った魔法使いは、隣の国へ仕えることを決めました。しかし、それを知った王は彼の裏切りに激怒し、魔法使いが隣の国へ出かけている隙に息子を捕えてしまった」

宰相は夜の暗闇を見つめたまま、少しだけ目を細めた。

「捕えられた息子は、別の魔法使いによって呪いをかけられました。裏切った父と同じように、王を助け、国のために働く。——生涯をかけて」

フェネルもトールと同じように窓の外の間を見つめた。

夜空に星はない。真っ黒に塗り込められたような空はまるで全てを吸いこむようだ。

「息子も父と同じように魔法使いとなりました。彼は才能ある魔法使いでしたが、自分に呪いをかけた魔法使いを呪い、王を呪い、そ

して国を裏切った父を呪いました。その彼の家が、魔法使いの家です」

目を焼くような光をずっと見てはいられないが、目に優しい闇はいつだって人に魅力的だ。

「人とほとんど交わることなく過ごした彼は、やがて人に恐れられるようになり、孤児を養子に引き取ったあと、孤独な最期を迎えました。しかし、彼にかけられた呪いは彼の養子にまで引き継がれ、その後も続きました」

トールは窓からフェネルに視線を戻し、フェネルも部屋へと視界を帰す。明るいシャンデリアが一層眩しく見えた。

「以後、魔法使いは王に求められる以外は隠遁生活を送り、死期が近くなると魔力の強い子供を養子に迎えるようになりました。たいがい孤児や親を亡くした子供です。中には子を成した魔法使いもありましたが、魔力が強すぎてほとんどの子供が早世でした」

子供たちを悼むように、トールは静かに目を閉じた。

「——どうして花嫁候補なんて選び出したのですか？」

宰相の話が本当ならば、魔法使いに花嫁をなどという王は今までいなかったはずだ。

どれほど言いつくろったとしても、王にとって魔法使いは便利な道具にすぎなかったのだから。そして、きつと力がなければ魔法使いは殺されてしまうのだろう。———今までの五十一人の中に、抵抗した者もいたはずだ。

トールはおもむろに視線を上げると、杖の先で床をトンと突いた。

「———呪いは年々、少しずつではありますが弱くなってきたのです。すでに、ガードウィン殿への呪いはほとんど無いに等しい」

「……呪いが、無い？」

思わずフェネルが呟くと、トールは少し視線を向けたが続ける。

「ガードウィン殿の持つ呪いは王家に対する忠誠心のみ。王から求められれば依頼は受けますが、断ることもできます。彼はすでに自

由だ」

フェネルは、いつかのトールとガードウインの会話を思い出していた。

ガードウインが囚われていると。

「彼は、珍しく先代の魔法使いから生まれた純粋な魔法使いです。ご両親は早くに他界しましたが、ご健在だった先々代に育てられました。彼らの時代には王家との仲も良好になっておりました。ですが、それが王家との縁を深めることになってしまった」

トールは溜息をつくように目を細める。

「先々代が亡くなられたあと、ガードウイン殿は新たに制約を結んでしまった。王家に今まで通り仕えると」

言葉を切ったトールはフェネルをのんびりと振り返る。

「しかし、ガードウイン殿の先行きを不安に思われた方が彼の誓約に条文を付けたしたのです」

「——まさか……」

思わず顔をしかめたフェネルを眺めて、トールは続けた。

「そうです。ガードウイン殿が結婚をするまで、というものを付けたしたのです」

フェネルは自分に向けられた予想外の話の大きさに溜息をつきたくなった。三百年越しの呪いなど大それた話だ。

「本当は、そのような誓約自体を反古にする必要があったのですが、ガードウイン殿は稀に見る力の持ち主でしてね。おいそれと放り出すわけにも行かなかったのですよ。——今回のことは、我々にとつては予想外のことでした」

トールはソファ越したったフェネルに向かってゆっくりと歩きだす。そんな彼を目で追いながら、フェネルは疑問を口にする。

「……どうして、身寄りもない私が選ばれたのですか？」

呪いがほとんどなく、王の覚えもめでたいガードウインであれば、どこかの良い家の娘も婿養子に、などという話があったはずだ。フェネルに真価はよく分からなかったが、彼の見た目は涼やかな好青

年だ。

事情を知れば、フェネルよりもずっと美人で気立てのいい娘だつて花嫁に選ぶことだつて出来たはずだ。

「フェネル殿はお美しいですよ」

トールは節度を保った距離にフェネルの前に立つと、少しだけ穏やかに笑んだ。自分の欠点を幾つも思い浮かべて、慰めはいらないと苦虫を潰したフェネルを遮って、トールは続ける。

「しかし、フェネル殿を選んだ基準は、一般的な花嫁候補の条件とは異なります。——先々代が亡くなっても結婚をまったく考えないガードウィン殿に、花嫁候補を探そうとした我々に彼が出したたった一つの条件に、あなたは当てはまるのです」

その、と宰相の言葉が指し示したのは、フェネルの白銀の髪だ。

「あなたには、魔力がない。それがガードウィン殿が出したたった一つの条件でした」

魔力のない娘を。

そんな娘をと望んだガードウィンの心のうちがわかるようだ。

彼は己の力が疎ましいのだろうか。

しかし、トール宰相はフェネルの沈んだ心をあざ笑うように続ける。

「多かれ少なかれ人には魔力があります。それは髪や瞳の色に現われますが、あなたのような白銀には魔力は宿りません。そして、その瞳にも。そのような人は大変珍しいのです。……ガードウィン殿は、よほど結婚をしたくなかっただけなのです」

確かに彼ならやりかねない。そんな珍しい条件を出せば、うつかり見つかってしまうと逃げ出せなくなるというのに。

「……宰相さまは、おわかりなのですね。私のこの髪の意味を」

呆れるでもなく、静かに答えたフェネルを見つめてトールは淡々と告げた。

「はい。あなたは、不義の子。……近親相姦でお生まれになったのですね」

きつと、何が悪いということではなかったのだろう。

フェネルの両親がたまたま姉と弟だったということだけで。

良家で暮らしていた彼らがどんな境遇で愛し合うようになったのかは、今となってはわからないが、フェネルにとって彼らは良い親であつたし、彼らは今までとは違う生活に耐えられず死んだということだけのことだ。

魔法使いになるわけでもないフェネルにとって、魔力などあるうがなかるうがどちらでも良いものだったが、この国では禁止されている行為で生まれた禁忌の子だと分かる人には分かるのだ。

フェネルの名前を決める時に、占ってもらった占い師が言い当てて教えてくれたのだという。

白銀の髪、水銀の瞳。

この二つを持つフェネルがどういう生まれの者なのか、ひと目で分かるのだと。

母の青い瞳の名残りはあるが、父の白銀は後天性のものだった。様々な心労が重なって、以前は夜のような黒髪が白銀に変わってしまつたのだ。

「なぜ、私を選んだのですか」

魔力がまつたくないとはまではいかなくとも、少ない娘は他にも居たはずだ。

フェネルに、自分を疎む気持ちはない。

どんな出生だろうと、フェネルは両親に愛されていた。他界した彼らに罪があるとは思わない。

自分は生まれて良かったのだと思って、ここまで生きてきたのだ。——そうでなければ、とつくの昔に自ら両親の元へと走っていただろう。

けれど、他人はそうではない。

髪と瞳は気味悪がられるし、意味の分かる人はフェネルを禁忌の

子だといわれなく嫌う。

そして、きつとガードウィンも知っていたはずなのだ。

トールは俯いたフェネルを見つめて言った。

「理由はガードウィン殿に直接尋ねてください。…けれど」

いつか見たように、トールはふと思いついたように微笑んだ。

「もしもあなたにこの国の秘密を話してあなたを殺してしまうようなことになれば、彼は悪魔のように怒り狂うのでしょうね」

「まさか」

たった一週間、共に暮らした相手をそこまで想えるはずもない。

自分のことは棚に上げて肩をすくめたフェネルをトールは笑った。

「これ以上、長居をして殺されないうちにお暇いたします。お時間ありがとうございます」

ただか一週間暮らした相手に命を賭す趣味はない。

フェネルが丁寧にお辞儀をすると、トールは「いいえ」と応えて、「本日はわざわざご足労いただき申し訳ありません。今後、何かございましたら、こちらに」

と、トールは懷から一枚の封筒を取り出してフェネルに持たせる。

「手紙を入れていただきましたら、私に直接届きますので、ご利用ください。封筒で私の文箱と繋がっておりますから」

「——宰相様と文通が出来ると言うのですね……」

手に置かれた封筒を眺めながら、フェネルは呆れていいのか嫌がつていいのかわからず微妙な顔でスカートのポケットにしまう。

「……一応、お預かりしておきます」

「私から何かございましたらお知らせいたしますので」

フェネルはスカートの中身が突然重くなったように感じて、げんなりと溜息をついた。

「今日はもう遅い。私がお送りいたします」

トールはいつものように、杖でトンと床を突く。慣れないフェネルは驚いた顔のまま、部屋からふっとかき消えた。

フェネルの残像を眺めるように、トールは小さく笑った。
「私はあなたであって良かったと思っているのですよ。本当に」

その空の下で

目を覚ますと、すっかり見慣れた森が視界に開けた。

朝日が差し込んでいる森は静寂に包まれていて、寄りかかっていた木から身を起こすと衣ずれが大きく聞こえた。改めてごく周りだけに張り巡らせた結界を補強してから、昨日補給した食糧で手早く朝食を済ませる。

この生活がもう幾日続いただろうか。

ガードウインは、ひと月を過ぎた頃から日を数えることをやめてしまった。

この世界の戦争は、まず魔法使いが駆り出されて、強力な結界で定められた戦場で争うのだ。

勝敗は、負けを認めるか、魔法使いの死亡。この条件は争う内容によって異なる。

ガードウインの住む国は隣国との領土問題で小競り合いを続けてきたが、今回の隣国側はいつもと違う。今年の穀物の不作を受けて本格的な侵攻をしたいらしい。ガードウインが負ければ、今度は兵士たちによる戦争になる。

魔法使いがほとんど日常的に組まれる対戦は、模擬戦争もしくは代理戦争だ。だから、各国は優秀な魔法使いを集めたがる。しかし、ほとんどの場合は抑止力のためだ。実際に戦闘を繰り返しているのは、ガードウインの住むこの国と隣国ぐらいのものだ。

隣国との折り合いは建国以来から険悪で、二つの国は競い合って力を蓄えてきた。それこそ、ガードウインの家系にかかる呪いをかけてまで。

けれど、その呪いもガードウインの代になると薄れ、ガードウインが戦っているのは兵士たちのように言いかえれば、愛国心や忠誠心といったものだろう。

ガードウインは、懇意にしていた王太子が即位した際に呪いの契約を更新させた。

先代、ガードウインの両親は幾人もの魔法使いが投じられた戦役で命を落とし、先々代、ガードウインの祖父もたくさんの戦場を経験してきた魔法使いだった。彼らは呪いに縛られてはいたが、すでに薄い呪いとは別にこの国を守るために戦った。だから、この家系に生まれたガードウインも、この国を守るために契約をした。それは祖父や両親のためでもあったし、城下の人々のためでもあって、目に映る人たちを守りたい一心だった。

けれど、その誓約に解雇条文が付け加えられた。

それも、ガードウインの結婚。

なんとふざけた条文を付けられたと思ったが、裏を返せば、結婚する気もないガードウインにとって、あつて無いような条文だ。

しかし、放置していたこの条文を、いつまで経っても実行に移そうとしないことに業を煮やされ、とうとうガードウインが苦肉の策で言った条件に見合う娘を連れてこられてしまった。

そして、不運だったとしか言いようのないフェネルという娘は、ガードウインの予想を上回る娘だった。

魔法使いの格好をしていたガードウインの正体を見破ってしまったのだ。

人は、思いこみに左右されやすい生き物で、ガードウインが少し想像を刷りこむ魔法を加えるだけで、容易くガードウインの姿を老人だと思いこんだり、ごく普通の青年だと思いこんだりする。彼女にも当然、出会った瞬間から魔法をかけていた。けれど、彼女はガードウインの魔法を破り、ドアを覗いてしまった。それが生来、魔力のないせいなのか、彼女だからなのか。解いてしまった反動で、彼女が熱を出してしまったことには魔法をかけたこと自体を悔やん

だ。魔法による負荷を退ける方法は魔法使いであれば誰にでもできることだが、何も知らない彼女ができるはずがなかったのだから。そして、彼女にそのことを謝る間もなく、この戦場へ召喚されてしまった。

ガードウインは荷を結界の中に封じ込めると、改めて森の茂みに身を隠した。

ひと月経った以上、あちらも精神的に追い詰められているはずなので、夜襲も警戒していたが、何の気配もなく一晩が過ぎた。敵の姿は未だに確認できていない。

一日に何度か動かす紈に遠距離攻撃が当たるという具合で、正体すらつかめていない。

魔法使いの代理戦にはつきりとしたルールは二つしかない。勝敗は負けを認めるか、魔法使いの死亡。そして、負けを認めた魔法使いを殺してはならないこと。

いつものように幾つかの紈を茂みの裏側で広げたチェス盤で動かすと、手ごたえがあった。紈が何かを捕まえている。

ガードウインの紈には簡単な戦闘と独立した思考が出来るように作つてある。チェス盤で繋いでいる紈とガードウインは情報の交換ができるはずなのだが、何者かに阻まれて紈は自分の捕まえているものを申告しようとしない。

（行つて、確かめるしかないようだな）

あからさまに畏だ。

けれど、他の紈を動かすわけにもいかない。

魔法使いの戦争に人数制限はない。

ガードウインは紈に警戒するよう命令してから、自ら報告の途絶えた紈の居る場所へと向かった。

広い結界戦場には、森や荒野が大きな街一つ分ほど広がっている。その中で紈が居たのは、ひどく開けた荒地だった。岩と枯草ばかり

で、過去に何度も魔法で焼かれて生き物の気配は無くなって久しい。チェス盤の反応を見ながら向かった先には、不自然に白い大きな籠と白い馬が見えてくる。その傍らにはやはり真白な甲冑を着たナイトが静かに佇んでいる。

籠には、一人の男が閉じ込められていた。

痩せぎすで長身、そして、ガードウィンと同じく金髪の男。魔法使いの装備は動きやすい脛当てや胸当てぐらいで、見た目には歩兵と変わらない。

男はガードウィンの姿を見とめると、青空を貫くような指笛を鳴らした。

ピイイイイイ！

甲高い音に呼応するように、今まで従順にガードウィンの命令に従っていたはずの囃たちが一斉にこちらへと集まり出した。そして、目の前のナイトは甲冑と同じ大理石色の剣を大仰に抜き放つ。

ガードウィンはチェス盤を閉じる。

普通ならばこれで囃が全て消えるが、制御を乗っ取られたナイトは止まらず流れるような動作でガードウィンに向かって剣を振りかぶる。

ブン！

勢いよく振り下ろされた鋭い剣筋を交わし、ガードウィンは男が捕えられている籠へと走る。

「殺せ！」

男が悲鳴のように声を張り上げた。

ガードウィンは迫りくるナイトを顧みて、勢いよく突き出された剣先を見つめて、そして寸でのところで籠を背に刺突を避ける。

ガキイイン！

籠の鉄柵を剣は貫き、ナイトはそれを引き抜こうとするが剣は同じ色の柵に縫い止められたように動かない。剣を辛うじて避けた男は、ナイトの様子に苛立ち、視線を上げて顔を引き攣らせた。

いつのまにかナイトの背後に回りこんだガードウィンが、チェス盤を放り投げたかと思うとそれが一振りの槍となったからだ。

男は慌ててナイトに捕獲の魔法を解かせようとするが、頑丈な檻は一向に消えない。

当然だ。あれは、ガードウィンの魔力で動いている。ナイトが使ったように見えても、魔法がガードウィンの手を離れることはない。ガードウィンは無造作に槍をナイトの背に向かって投げた。普段はこの程度の槍がナイトの甲冑にすら刺さることはないが、槍は容易くナイトの心臓と、

「あ、悪魔め！」

金髪の男の腹を抉った。

男の血を浴びたナイトは真っ赤になったまま籠と共に消え失せ、あとには男が荒地に放り出される。

腹から生やした槍をガードウィンが引き抜くと、男の口から血が溢れ出す。

「負けを認めてください」

ガードウィンの静かな声に、男は血を吐きながら笑った。

「それはお前だ！」

その声に、二人の周りを取り囲んだのは、ナイトと同じような大理石色の囷達だ。キングは鎚矛を、クイーンは銃を、ビジョップは錫を、ルークは戦鎚を、ポーンは槍を構えて一斉に襲いかかろうと飛び上がる。

ガードウィンは再び槍を放り投げた。それは一瞬で空中に溶けたかと思うと半瞬でナイトが持っていたような長剣に変わる。それを

ガードウィンが掴み取った瞬間、今まさに銃を構えたクイーンの胸へ吸い込まれるように剣が貫く。

隣からビジョップの錫を手甲で弾いて、戦鎚を振り上げたルークの腹を薙ぐ。ポーンの鋭い槍の突撃をビジョップの前で避けると錫をガードウィンに取られたビジョップはポーンの槍に突かれ、ポーンもガードウィンの剣に首を思いきり切り裂かれる。

残ったキングは地面に倒れている男を守るように立ち、鎚矛を手にガードウィンを睨み据える。しかし、ガードウィンはまた剣を放り投げ、次に掴んだのは小型の斧だった。造作なく投げ放つと、それをキングは避けることもせず額に斧が刺さる。

キングが倒れ伏すと他の倒れた囃達も共に溶けて消えた。

残された男は茫然とそれを見送り、腹の痛みに呻いた。

「負けを、認めてください」

「……の、悪魔！」

ささやくように言うガードウィンに、男は語気荒く叫ぶ。

「親を殺した子供の末裔！ 親を裏切り、禁忌を犯したその罰は消えぬようだな！」

男が指したのは、ガードウィンの赤い瞳のことだ。

金の髪は代々受け継がれているものだが、この赤い瞳も持った者は五十二人の魔法使いの中では二人きりだ。ガードウィンと、そして親を恨んで王を恨んでこの国に呪いをかけられた魔法使いの息子。彼は、呪いを受けてしばらくのち、この代理戦で実の父親を殺した。

その後、彼の青かったはずの瞳は赤に変わったという。

「——あなたは、彼の血筋なのですね」

この、倒れて脂汗をかいている男は、息子の父の血筋なのだ。

その証拠に彼は金髪に青の瞳で、顔立ちもガードウィンの祖父や父によく似ている。

「罪深いお前の一族と一緒にするな！」

叫ぶ男の額に呪いが刻まれている。

ガードウィンと同じ呪いだから視えるのだろう。

もつとも、この男に刻まれているのは、国への強い忠誠心と命乞いを出来ない呪い。

ここで呪いを解いてやったとしても腹の傷を手当てされるのかさえ怪しい。

きつと、この男はたとえ無事に国へ帰っても殺される。

「赤の悪魔！ 裏切りの道化！ お前さえ、お前さえ居なければ……！」

これまでずっと言われてきた言葉だ。

代理戦で戦うような者は隣国以外に滅多に居ないが、同業者は口をそろえてガードウィンを赤目の悪魔と呼ぶ。それが才能のせいなのか、この、遠い肉親にも同情の一つも湧かない恐ろしく冷めた心を言うのか。

いつもであれば、傷つけることも殺すことさえもが仕方ないと、国の人々のためだと剣を振り下ろす手を止めたりしない。

けれど、今に限ってひどくガードウィンの心を責める者がいる。

彼女は、いったいどう思うのだろう。

白く、美しい彼女の水銀の瞳に、ガードウィンのこの血濡れた姿はどう映るのだろうか、と。

思い出の残る家

すでに慣れた錠の重みを確かめながら、フェネルは鍵を回した。ここ数か月ですっかり慣れた感触だった。

ガードウィンが戦場へ行つて、すでに季節が二つ廻ろうとしていた。

春だった陽気はすでになく、今は冷たい雪の季節だ。この国の雪はそれほど深くはならないが、それでも毎年街中が真っ白になるほど積もる。

この季節になると人々は家にこもりがちになるので、店主たちは従業員たちにまとめて休みを出す。フェネルも例に洩れず、長い休みと少しばかり上乘せされた給料を渡された。

そして、この雪の中、魔法使いの家へと通っている。

あの魔法使いがしばらく帰ってこないことを知って、まずフェネルが気になったのは、あの家の掃除だ。少しでも放っておくとすぐに埃を溜めこんで、彼が帰る頃にはひどいことになっているだろう。出ていく前に見たところ、布をかけておくことさえしていなかったから、帰ってきててもきつと寝る場所さえないに違いない。

そんなことを、恐れ多いとは思ったが宰相へ手紙を送ると、返事は快く返ってきた。魔法使いの家の鍵と共に。

魔法使いが長い間家を開ける時には鍵をいつも預かっているのだという。そしてフェネルには、好きに過ごしていいとさえ書き添えてあった。

太い梁と柱に守られている家が、よほどのことでもない限り雪の重みで傾くことはないだろうが、フェネルは雪の季節に時折掃除に出かけることにした。

知らないわけではないが、他人の家へと勝手に入ることに、始め

は躊躇も覚えたが、たった一週間ほど空けただけで食卓に降り積もった埃を見て思い直した。親切な家政婦にでもなったつもりでいれ
ばいいのだ。

フェネルは三日に一度、雪の積った道をのんびりと魔法使いの家
へと通うことにした。雪の季節の間だけでも、一日ひと部屋ずつ掃
除していけば、以前と変わらないほどの家の様子は保てるだろうと
思ったからだ。

ガードウインが薬の調合などに使っていた部屋を除けば、台所に
洗面所、トイレに風呂場に応接間、それから部屋は四つ。順調に一
つずつ掃除をして、フェネルはある日とうとうガードウインの私室
の前に立ってしまった。

ガードウインが入ってはいけないと言ったのは、危険な魔法を扱
うこともあるからと、薬の調合を行う部屋だけ。自分の私室にはよ
りつかないと思ったのか、近寄るなとさえ言っていない。実際、フ
エネルがこの部屋の前を通ったのは、興味本位でうっかり覗いてし
まった時だけだ。

ノブに手をかけてから、鍵でもかかっていたらフェネルは思っ
たが、皮肉にもドアノブはゆっくりと回った。

（ベッドに布をかけるだけでいいのよ……）
フェネルは後ろめたさをそう言い訳して、思い切ってドアを開け
た。

彼の部屋は、まるで古めかしい書斎だった。

壁一面には本が並び、その中心には重そうな書斎机とたとえ子供
が飛び跳ねても壊れそうにない頑丈そうな椅子が、そして奥に広め
のベッドが主が出ていったときのまま埃を被っている。

ほとんどの物が片づけられている中で、唯一、明かりのりの窓辺
のチェストにフェネルは吸い寄せられた。

小春日和を受けて小さな写真立て達が薄暗い部屋の中で淡く浮か
び上がっている。

古い家族写真だった。

写真は貴族が楽しむもので、庶民には馴染みのないものだがたまの記念に撮る者もいる。だからフェネルは知らないわけではなかったが、それでも珍しいものだった。

優しいセピアの色彩の中で家族が楽しげに笑っている。

どこかの草原だろうか。誰かによく似た男女に囲まれ、面影のある幼い少年が楽しそうに彼らに抱かれて、その傍らで威厳のある壮年の男が豪快に笑っている。

他にもある写真にも温かな家族が幸せそうに笑っていた。

きつと、ガードウインの家族だ。

彼がフェネルに家族の話をすることは無かった。

それは、フェネルの境遇を慮つてのことだったのかもしれないし、すでにない家族のことを多く語りたくなかったのかもしれない。

四つある部屋のうち、一つは女性の部屋が、一つは子供部屋が長い間使われないまま残されていた。

今のガードウインが使っている部屋は、恐らく壮年の男の――すでに亡くなったという彼の祖父の部屋なのだろう。

少年の成長に合わせて撮られていた写真は、少年が祖父と二人だけで写るようになってすぐ終わっているようだった。以降の写真はない。

フェネルの両親は、フェネルが物心つく頃にはすでに他界していたので、愛されていた記憶はあるが、写真のような温かな記憶は少ない。

子供のころのことで思い出すのは、最初にフェネルの面倒を見てくれた時計塔のおじいさんのことだ。彼は年老いて一人者だったが、取り残されたフェネルを不憫に思つて、時計塔でしばらく面倒をみてくれていた。彼が病気で倒れ、あっけなく亡くなる直前に、今、働いている菓子屋の女主人にフェネルのことを頼んでくれさせたのだ。彼の葬式を教会の神父さまに頼み込んで慎ましく行ったあと、フェネルは菓子屋で修業をすることになった。

フェネルにとっての家族は誰もいなかったが、孤独ではなかった。

だから、この家で一人暮らしているガードウィンの孤独はフェネルには想像がでなかった。温かい家族を次々と失くして、誓約だろつが、呪いだろつが、何かに繋がりを求めたくなるのは、人として間違つた感情ではないようにも思えた。

きつと、フェネルは宰相の思惑にはまっている。
それでも思つた。

結婚のことや不幸な境遇のことなんて本当はどうでもいい。
彼と話したい。
何でもいい。他愛もないことを。

フェネルは写真とベッドに布をかけて、部屋を出た。
思いのほか長く部屋に居たらしく、窓の外の日が傾きかけている。
日が落ちるまでに帰らなくてはとフェネルは慌てて毛織のコートを着こんだところで、スカートのポケットが重くなっていることに気がついた。

宰相からもらった封筒だ。特別な封筒なので、いつも持ち歩くことにしているのだ。開いてみると上質な便せんにフェネルにも読みやすく、宰相にしては短い手紙がつづられていた。

フェネルはそれに目を通すが早いか、封筒をコートに押しこむが早いか。

いつものように魔法使いの家に鍵をかけるのももどかしく、家を飛び出すと街外れの道を走つた。
手紙にはこうあつた。

——本日、魔法使い殿が帰還されます。

物語の結末

戦場を出されたのは、金髪の男と対峙した三日後だった。

他に戦場に居た魔法使いたちが敗北宣言をしたのだ。男の遺体は彼らによって引き取られていった。

この戦役で、隣国はこの国への侵犯を完全に封じられる形となった。結界の中に居る魔法使いたちには伝えられていなかったが、あちらではクーデターが起こり、すでにこの戦いを命じた者たちは皆失脚したか殺されているという。

あとの政治的なことは、魔法使いが入れる領分ではない。

そんな情勢をガードウィンに伝えにやってきたのは、忙しいはずのトール宰相だった。結界の前で馬車を構えて待っていたかと思うと、ガードウィンを有無を言わず箱馬車に放り込んだのだ。

「——あなたの倒した彼が、最後の末裔だったそうです」

宰相は珍しく言葉を切った。

彼は仲間の制止も聞かず、単身ガードウィンとの対決を自ら望んだのだという。呪いのことを知りながら、それでも止められなかったことを彼の遺体を囲んでいた魔法使い達は悔やんでいた。

「この戦役に志願したのは、彼は自ら死ぬことすら出来ず、次代に呪いを引き継がなければならないという苦悩の結果なのだそうです」

希望もないとはこのことだ。

「……お陰で、私は最後の親戚さえも殺してしまいました」

ガードウィンは何か大切なものを全て失ったような気分で息をついた。

彼が死んだことで、呪いを受け継いでいるのは己一人になる。

「どうですか。私の一族に呪いをかけた張本人としては」

話を向けたのは、正面でいつもの三つ揃いで静かに座っている宰相殿だ。

トールは感情の薄い顔でガードウィンを見つめて目を細める。

「……いつから気付いていたのですか？」

「実は、私の一族はあなたのことをすでに知っていました。あなたが、あなたこそが三百余年の時を生きている魔法使いだということも、呪いをかけた魔法使いだということも」

そう。

ガードウィン達に呪いをかけたのは、この目の前のトールだということ、祖父が亡くなる前に教えてくれた。そして、これは決して宰相に悟られてはならないとも。

「あなたは、姿を変え、名前を変え、この国に尽くし続けているのですね。——私の一族にかけた呪いをご自分にもかけて」

トールはガードウィンを見据えて、そして口を開いた。

「——そうでなければ、あなたの一族にとっても詫びることができないと思ったのです」

静かに語り出す声にガードウィンは黙って耳を傾ける。

「当時の私は、魔法使いとしては力がありましたが、うまく仕官できずにいました。ですから、あなたのご先祖である親子に呪いをかけることにほとんど抵抗などありませんでした。戦ばかりの時代でしたし、非合法な話はどこにでもありました。……けれど、呪いが次の代にまで受け継がれていくことになることは予想ができませんでした」

馬車がいったい何処へ向かっているのか気になったが、ガードウィンはそれを問わなかった。

「だから、同じ呪いを？」

ガードウィンの問いにトールは肯く。

「しかし、時代の方が魔法使いを次第に必要としなくなってきたいます」

戦が盛んな時代とは違い、すでに魔法使いが必要な世の中ではな

いのだ。

兵士としての魔法使いよりも、今は知識人としての魔法使いが重用される時代となっている。だから、ガードウインのような呪い持ちの古い魔法使いは今の時代にあつては取り残されている。

ガードウインが、すでにこの国にとって不要になっていることは知っている。

それでも必要なことがあればと誓約を結んだが、それも追い出される形となった。

馬車の行先が国外であれ、処刑台であれ、ガードウインはそれはそれで構わなかった。

ガードウインが死ねば、呪いは全て解放される。

「長い時が過ぎました」

トールは思い出を眺めるように馬車の小窓から外へと目をやる。

「あなたの呪いも、私の呪いもすでにない。——あなたは自由なのですよ」

自由という言葉に目線を上げると、トールはゆっくりと笑んだ。

馬車が唐突に止まった。

トールに降りるよう促されてガードウインが戸を開けると雪が舞っていた。

結界の中の世界は時は止まった状態になるため、外との時間に誤差があるのだ。今が冬だというと、すでに季節を二つは越している。そこまで考えて、この雪の季節が自分にとって見慣れた景色だということに気がついた。

降り立つ石畳に見憶えがあるのは当然だ。

ここは、生まれ育った国の関所の門なのだから。

雪の季節に出歩く人は少ない。

積った雪はおざなりに両脇によけられているだけで、ガードウインの足元にも薄く雪が積もっている。

白い息を吐きながら門へ目をやると、小柄な人影が見えた。

花びらのように舞う雪の中で、白い彼女は寒そうだった。雪が跳ねる。

白銀に輝く髪が雪の中を踊り、あっという間にガードウィンの前へとやってきた。

思わず腕を広げてためらった。

人を殺してきた腕で、真っ白な彼女を抱いてもいいのか。

けれど、彼女の方は何のためらいもなくガードウィンに飛び込んでくる。

反動で屈んだガードウィンの耳元で、鈴のような声が言った。

「おかえりなさい」

寒そうだと思った彼女がとても温かくて、ガードウィンはそっとその柔らかな背中を抱いた。

「——まったく、あなたには驚かされてばかりです。フェネルさん」

そう言って笑うと、鈴を転がすように彼女は不服を言うので、ガードウィンは改めて笑った。

「ただいま帰りました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8280k/>

魔法使いの嫁

2011年2月11日00時10分発行